ISwithD〈インフィニット・ストラトスwithドラグナー〉

蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳｗｉｔｈＤ〈インフィニット・ストラトスｗｉｔｈドラグナー〉

【Ｎコード】

Ｎ５３５１Ｒ

【作者名】

蛇

【あらすじ】

謎の機体を追っていたケーン・ワカバ、タップ・オセアノ、ライト・ニューマンの三人は異世界へと迷い込んだ。そこはＩＳという女性にしか扱えない軍事兵器が存在する世界だった

プロローグ（前書き）

始めちゃいました

プロローグ

西暦２０８８年
軍事政権による統一国家、ギガノス帝国との戦いから1年が過ぎた
この日、この戦いの英雄的存在、ドラグナー遊撃隊の三人は最近各国にある地球連合軍の基地を襲撃していた謎の機体を追っていた

「この！ちょこまかと逃げやがって！」
ケーン・ワカバ准尉は愛機である〈Ｄ－１カスタム〉を駆りながら謎の機体を追っていた

「ケーン！むきになるんじゃねえ！」
そんなケーンを追うようにタップ・オセアノ准尉は〈Ｄ－２カスタム〉駆りながら〈Ｄ－１カスタム〉に続く

「二人とも気をつけろ、敵さんなにかしようとしてるぜ」
そんな二人の少し後ろを〈Ｄ－３〉で行くライト・ニューマン准尉は謎の機体からの強い熱反応を察知し二人に注意を促す。
その時謎の機体は腕をドラグナー３機にむけ、そこからビームを発射する

「うわっ！危ねぇ～、なんだ今の？」
ビームを避けながら相手の使った武器に疑問を感じるケーン

「すげぇ威力だなおい・・・・」
その威力に驚いている様子のタップ

「光子バズーカみたいなものか？だとしたら当たるわけにはいかないな」

先程の攻撃を冷静に分析するライト
と、三者三様な反応を見せる三人
すると謎の機体は洞窟へと入っていく

「あ！待ちやがれ！」
それを追い洞窟へと入るドラグナー３機
三人は知らない、この行動が三人の運命を大きく狂わせたことを
この日ドラグナー遊撃隊の三人は消息を絶った

第1話　三バカ、異世界に立つ（前書き）

はじまりです

第1話　三バカ、異世界に立つ

ＩＳ、正式名称インフィニット・ストラス。元々は宇宙空間での活動を目的として作られたものだがその既存の兵器を越えるスペックにより兵器となったパワードスーツ。この兵器の欠点といえば女性にしか扱えないということだろうか

ＩＳ学園アリーナ
今ここでクラス代表を決める戦いが繰り広げられていた。一人はイギリスの代表候補生セシリア・オルコット。もう一人は唯一、男でＩＳを動かすことのできる男、織斑（おりむら）　一夏（いちか）
一夏のＩＳ『白式』が一次移行（ファーストシフト）を完了したその時、なにもなかった空間に光とともに三機の全身装甲（フルスキン）のＩＳが出現した

Ｓｉｄｅ三バカ

「あれ？いつ洞窟をでたんだ？」
ケーンは周りを見ながら考える
「というかケーン。ドラグナー改造される前にもどってないか？」

「そういやなんか変だな、なんかドラグナーと一体化しちまったみたいだぜ」

「二人とも、どうやら問題はそれだけじゃないみたいだぞ」
ライトの言葉に二人は改めて周りを見渡す
まず目に入ったのは妙なスーツを着て空を飛んでいる男女達
そして見たことのない風景である

「な、なんだあいつら空飛んでやがるぞ」

「というかやけにこっちを見てないか？」
その時女、セシリアがライフルを構えうってきた

Ｓｉｄｅ一夏

「お、おい。なんでいきなりうってんだよ！」

「あのＩＳ達どう考えても怪しいでしょう。だから撃墜したほうがいいに決まってますわ」

「だからって、うわっ！こっちにむかってきやがる！」

Ｓｉｄｅ三バカ

「あのやろう、ぶっつぶしてやる！」
ケーンはそういうとセシリアのほうへと接近していく

「おいケーン！不用意に近づくな！」
ライトは忠告するがケーンはまったく聞いておらずハンドレールガンを構えうちはじめる

「おらおらおら！」

「くっ！なら・・・・こうですわ！」
セシリアは一夏のほうに展開していたビット型の武器、ブルー・ティアーズをケーンの周りに展開する

「さぁ、踊りなさい！」
ブルー・ティアーズからビームが放たれるがケーンはそれを確実に避けていき

「おらおら！」
一機ずつ確実に破壊していく

「なっ！・・・・」
そして腰のレーザーソードをぬきセシリアにそのまま接近する
「かかりましたわね！」
セシリアの腰部に広がったスカート状のアーマーから突起が外れ、動いた
「ブルー・ティアーズは六機あってよ！」
そこからミサイルが発射される
「やばっ！」
しかしミサイルは見当外れの場所に飛んでいく
「な、なんで！？」
「ライトか？助かったぜ！」
ライトのほうをみると頭部のレドームを回転させているドラグナー3がいた
どうやらジャミングでミサイルの軌道を変えたようだ
「キャア！」
さらに驚きで固まっているセシリアにむけてタップが砲撃する
「よし今だ！」
動きが止まったところをレーザーソードで一気に斬る。その一撃が効いたのか、セシリアは気絶しＩＳが解除され落下していく
「やべっ！」
ケーンは急降下しセシリアを抱き抱える

「おい！あんた！」

「え？」

ケーンは一夏に声をかける

「こいつ休ませる場所はないのか！？」

「え～と」

一夏は迷う。この不審者達を学園に入れていいのかと

『何をしている織斑。とっとと連れて来い』

「あっ、んじゃついて来てくれよ」

姉であり先生である千冬に言われ三人を案内する一夏。物語ははじまったばかり・・・・・

第1話　三バカ、異世界に立つ（後書き）

ケーン「さぁ！次回予告いくぜ！」

タップ「へんなところにやってきちまった俺達は一夏とかいうやつに連れられて学園の中へ！」

ライト「次回『三バカ入学する』」

ケーン「お楽しみに～」

第2話　三バカ、入学する（前書き）

お待たせしました
第2話です

第2話　三バカ、入学する

三人は一夏に案内されピットへと入る。ピットには三人の女性がいた

「お前達が侵入者だな」
凛としたスーツ姿の女性が三人に聞く

「え？侵入者？どこにいんだよ」
セシリアを抱き抱えたまま辺りを見回すケーン

「ケーン、立場的に考えて俺達だろうよ」

「おいおいライト。冗談はよせよ。俺達は気がついたらここにいたんだぜ。侵入したわけじゃないだろ」

「俺達からしたらそうだろうが、あちらさんからしたらいきなり侵入したうえに女性を攻撃した暴漢ってことになるだろうな」

「あれは正当防衛だろ！なぁ！」
ケーンは隣にいた一夏に話しをふる

「えぇ！俺！？え～と、警告もなしに先に攻撃したのはオルコットだし正当防衛、なのか？」
いきなり話しをふられ驚くがとりあえず答える一夏

「ほら聞いたろ！」

「あの～とりあえず皆さんＩＳを解除してくれませんか？」

このままでは話が進まないと眼鏡の女性が話題を変える
それを聞いた一夏は白式を解除するが三バカは頭に？を浮かべる

「ＩＳ？なんだそれ？タップ知ってるか？」

「いや知らないな。ライトお前はどうなんだ？」

「ＭＡ（メタルアーマー）ならわかるがＩＳなんて聞いたことないぞ」

「え、ＩＳを知らない？あなた達が今装着しているのはＩＳじゃないんですか？」

「装着？そういえばなんでドラグナー着てるんだ？」

ケーンは自身の今の姿を見る

「・・・・・ちょっといいか？」

ライトが手を挙げる

「なんだ？」

「ＩＳについて詳しく聞きたいんだが」

「ふむ、まぁいいだろう。本当に知らないようだしな。ＩＳとはだな・・・・・」

スーツの女性が言うにはＩＳ、正式名称〈インフィニット・ストラトス〉宇宙空間での活動を想定し開発されたマルチフォーム・スーツである。しかし従来の兵器をはるかに凌駕するその性能により飛行パワード・スーツとして最強の兵器となってしまったとか

そしてこのＩＳは女性にしか起動できないらしい

「え、じゃあこいつも女なのか？」

ケーンは一夏を指差す

「俺は男だ！」

「一夏落ち着け」

ケーンに飛び掛かろうとする一夏を髪を後ろでくくった女性が止める

「というか宇宙空間での活動なんてＭＡとかで充分だろうになんでそんなもの作ったんだ？」

タップは首をかしげる

「私からも質問だ。お前達がさっきから言っているＭＡとはなんだ？」

「え、あんたＭＡを知らないのか！」

ケーンが驚きの声をあげる

すると今まで黙っていたライトが口を開く

「二人とも、ここは異世界かもしれない」

「「「「「「はぁ？」」」」」」

その場にいたライト以外の全員がキョトンとする

「まずあんた達ギガノスという言葉を聞いたことあるか？」

「ぎがのす？悪いが聞いたことないな」

「俺も」

「私もです」

「私も聞いたことがないな」
この発言にケーンとタップは驚きライトは「やはりか」とこの答えが返ってくるのをわかっていたように頷く
「で、そのぎがのすとやらがお前達が異世界からきたというのになんの関係があるんだ？」
「『ギガノス』この言葉は俺達の世界の住人なら誰もが知っている。なんせ地球連合から独立して戦争をふっかけてきた連中なんだからな」
「つまりギガノスのことを知らないってことは・・・・」
「ここは俺達のいた世界じゃないってことなのかライト」
「そういうことだ」「でもそれだけじゃ異世界から来たという証拠には「わかった、信じよう」織斑先生！？」
スーツの女性、織斑の言葉に三バカは少し驚く
「いいのか？俺達が嘘を言っているだけかもしれないぞ？」
「お、おいライト」
「ＩＳという存在を知らずこちらの知らない知識を持っている。嘘を言っているだけかもしれない？さっきからのお前達の反応を見ていれば嘘ではないことぐらいわかる」
信じてもらえたことに三バカは安心する
「う、う～ん。ここは？」
ケーンの腕の中でセシリアが目を覚ます

「ん？起きたのか？」
セシリアはしばらくボーッとすると今の状況（ドラグナー1に抱き抱えられている）を理解する
「は、離しなさい不審者！」
「な、不審者だって！お前が気絶したからここまで運んでやったのによ！」
「気絶したのはあなたのせいじゃありませんか！」
「いきなり攻撃してきたのはお前だろうが！」
「お二人さん。その状態で喧嘩しても痴話喧嘩にしか見えないぜ」
タップの言葉にセシリアは顔を赤くする
「早く降ろしなさい！」
「けっ、可愛いげのないやつだぜ」
そう言いながらセシリアを降ろすケーン
「さてお前達、まずはそれを解除しろ」
「解除しろって言われてもなぁ・・・・までよ？クララちゃん、解除できるか？」
するとドラグナー1が解除されパイロットスーツにネックレスをつけた姿になる
「あれ？俺こんなネックレスつけてたか？」

ネックレスにはＤ－１と文字が彫られている

「どうやらクララはついていたようだな。じゃあマギー、解除してくれ」

「よーしソニアちゃん、解除お願い」
ドラグナー２とドラグナー３が解除されケーンと同じ格好になる二人
ネックレスにはそれぞれＤ－２、Ｄ－３と彫られている
そのネックレスを見た織斑は

「ふむ、どうやらお前達のドラグナーとやらはＩＳになってしまったようだな」

「「「へ？」」」
三バカは驚きを隠せない。なにせ自分達の乗っていたドラグナーがＩＳになってしまったのだから

「とりあえずそのＩＳを貸せ、解析する必要がある」

「ちゃんと返してくれるんだろうな。いてっ！」

「ちゃんと返してくれるんですか？だ。見たところ私より年下のようだし礼儀正しくしろ。それと返却は必ずするそれまで別室で待っていろ」
渋々ＩＳを渡した三バカは眼鏡の女性、山田真耶（途中で名前を聞いた）に連れられ別室にむかった

別室
三バカはソファに座りながらこれからについて話し合っていた
「金もない住む家もない、これからどうするよ？」
「仕事をして稼ごうにも戸籍がないからなー。軍にでも入るか？」
「戸籍がなければ同じだろ。とりあえずは今日の食事と寝る場所の確保だな」
ああでもない、こうでもないと話していると織斑と山田の二人が入ってきた
「まずはこのＩＳを返す」
織斑からＩＳを受け取る三バカ
「お前達はこれからどうするつもりだ？」
「それを今話し合ってたんすよ」
「でもなかなか決まらなくて」
「なら、この学園に入学したらどうだ？というかしろ」
この言葉に三人はキョトンとする
「ど、どうしてそうなるんだ？」

「まずさっきも言ったがＩＳは本来女性にしか起動できない。つまり男性の操縦者は貴重なんだ。そんな貴重な者を野放しにしてみろ。各国がお前達を手に入れようと必死になる」

「うわぁ・・・・」

「もう一つはお前達のＩＳだ。性能は第３世代なみだがお前達のチームワーク、そして操縦の腕により国一つと戦えるぐらいの力を発揮する。野放しにしておけばなにをするかわからん」

「な、俺達は国と戦争するつもりはねぇぞ！」

心外だとばかりに怒鳴るケーン

「だとしてもだ。それに入学しても学費は免除。生活費のほうも国からだしてくれる」

「なんか話がうますぎるな」

「それだけ必死ということだ。で、どうする？」

三バカはしばらく考え

「入学することにする」

「俺も」

「俺もだ」

結論をだした

「よし、取り合えず部屋は用意した。今から案内する」
入ること確定してたんだなぁと思いながら三バカは寮へと案内される。織斑は一つの部屋の前で立ち止まりケーンに鍵を渡す

「ここがお前の部屋だ」

「あれ？三人同じ部屋じゃないのか？」

「ＩＳ学園の寮は二人部屋だ。よってお前だけ他の生徒と同室だ」

「よかったなケーン」

「無事でいろよ」
ライトはニヤニヤしながらタップはなにやら心配そうに別の部屋へと案内されていった

「なんだ二人して？」
ケーンは鍵を開ける
このときケーンは気づいていなかった。ＩＳは女性にしか動かせない。つまりその専門校であるＩＳ学園はほぼ女子校だということにケーンは硬直した。ケーンの目の前にはおそらくシャワーでも浴びたのだろうタオル一枚のセシリアがいたのだから

「キャーーー！」

「ギャーーー！」
ＩＳ学園の寮に一人の哀れな男の声が響いていた

第2話　三バカ、入学する（後書き）

教えて！ライト先生！

ライト「よ～しみんな席につけ。授業を始めるぞ」

ケーン「ライト、質問」

ライト「なんだねケーン君。あと先生をつけたまえ」

ケーン「なんで俺達が生徒でお前が先生なんだ？」

ライト「作者が決めたからだ」

箒「先生、質問です」

ライト「なんだね箒君」

箒「なんで今回の話で私の名前が出てこなかったんですか？」

ライト「作者が出すタイミングをつかめなかったからだ。あとタップ君は早弁をやめなさい。さて今日の授業はギガノスについてだ」

一夏「ギガノスってケーン達の世界ならだれもが知ってるっていう」

ライト「そう、そのギガノスだ。ギガノス、正しくはギガノス帝国は月に誕生した軍事政権による統一国家だ。このギガノス帝国は地球の統一連合、地球連合に対し一方的に独立を宣言し宣戦を布告した」

一夏「そのまま戦争になったのか？」

ライト「たしかに戦争にはなったが地球連合は開戦当初は劣勢だった。ギガノスの月面のマスドライバーやＭＡなどの兵器に対し地球連合はいいようにやられていた。この状況は俺達がドラグナーを手に入れるまで続いたのさ」

セシリア「なんでいいようにやられていたんですの？」

ライト「開戦当初、地球連合にはＭＡに対抗できる兵器が存在しなかったのさ。だけどＤ兵器の開発者であるラング・プラート博士が地球連合に亡命してきたことによりやっと連合製ＭＡドラグーンが開発されたんだ」

セシリア「ではなぜラング博士は連合に亡命したのですの？」

ライト「ラング博士はマスドライバー攻撃に反対していた、結果ギガノスと対立することになったんだ。そしてここからギガノスは敗北への道をたどることになる。
まずはギガノスの実質的指導者ギルトールをドルチェノフが暗殺。
次にギガノスの蒼き鷹、マイヨ・プラートがギルトールの遺志によりマスドライバーを破壊。
ドルチェノフはマイヨを殺そうとするも失敗。そしてマイヨがギルトールの無念を晴らすために行動を開始。
そしてドルチェノフがマヌケな行動でギルトールを殺したのは自分だとバラシたことによりギガノスの大半の兵士がドルチェノフから離反。最終的にケーンとマイヨの二人との戦闘で死んじまったのさ。
これでギガノスとの戦争は終わりを迎えた」

ケーン「いや～こうして聞いてると俺達よくやったよな」

タップ「最初はギガノスのやつらに一泡ふかせてやろうとおもっただけなのにな」

ライト「さて今回の授業はこれで終わり。次回はＭＡ（メタルアーマー）についてだ。次回もよろしく！」

第3話　ケーン、代表になる（前書き）

まぁいつもどおりひどいできです
※アンケートから一夏ハーレムをなくしました

第3話　ケーン、代表になる

Ｓｉｄｅセシリア
教室

「はぁ～」
自分の席に座りながらため息をつくセシリア
セシリアは気になっていた
突然現れ、自分のことを難無く倒した男、ケーン・ワカバのことが最初はただの不審者としか思わなかった。しかしその強さ、魅力にいつのまにか惹かれ、さらに裸を見られたことにより不審者から気になる相手へとシフトしていた

「みなさん、おはようございま～す」
セシリアが考え事をしていると副担である山田真耶が教室に入ってきた

「えぇ、今日は皆さんに転校生を紹介します」真耶の言葉にクラス中がざわめく
そんな中セシリアは確信していた。あの人だと

教室に一人の男が入ってくる

「では自己紹介をお願いします」
真耶の言葉に男は口を開く

「俺はケーン・ワカバ。よろしくな！」
男、ケーンはいい笑顔でグッとサムズアップした

Ｓｉｄｅケーン
クラス内が一瞬静まり返る
「あれ？」
次の瞬間

「「「「キャーーーー！」」」」
黄色い悲鳴があがる

「男子、二人目の男子！」

「不良（ワル）みたいな雰囲気がしてカッコイイ！」

「付き合ってーー！」

「は、ははは」
あまりの勢いにケーンは苦笑いする

「やかましいぞ！黙らんか！」
いつのまにかいた織斑千冬の一声に女子達は黙る

「ワカバ、オルコットの隣に座れ」
ケーンはセシリアの右隣に座る

「さて、クラス代表のことだが各クラスから二人ずつ選ぶことになった。これは隣の2組にも男子が二人転入してきたためバランスをとるために決まったことだ。では1組の代表だが私が独断で決めてきた。まずは織斑、お前だ」

「えぇ！なんで俺！？」

「そしてもう一人、ワカバお前だ」

「お、俺も！？」

「以上だ。異論は認めん」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！いきなり代表とか言われても理解できねーよ！」

ケーンは立ち上がり千冬に意見する

「お前が乱入した織斑とオルコットの戦いは覚えているな」やれやれといった感じで説明を始める千冬

「それがどうかしたのか？」

「あれはクラス代表を決めるための試合だったのだ。そこにお前達がきたおかげで試合は中止になってしまった」

「ようするに責任をとれってことか？」

「まぁそういうことだ。それに代表候補生であるオルコットを倒すほどの腕前なんだクラス代表もつとめられるだろう」

「はぁ～わかりましたよ。やればいいんでしょ、やれば」
ケーンはかなりめんどくさそうに承諾する

「わかればいい。それでは1時間目の授業の用意をしておくように」
千冬は教室からでていく

「俺の理由は？」
無視された一夏であった

そのころのタップとライト
「「「「キャーーー」」」」
こちらもケーンと同じような状況になっていた

「ははは、ケーンも同じ目にあってるのかね」
とタップ

「８０％、なってるんじゃないか？」
とライト

「残りの２０％は？」

「変態扱い・・・・とか？」

「なんだそりゃ」
ハハハと陽気に笑うタップとニヤリと笑うライト達であった

再びＳｉｄｅケーン
男はスケベである。どんなに真面目な男だろうと男の性には勝てないのである
つまりどういうことかというと

「（くっ、刺激的すぎるだろ）」
ケーンは必死でジャージ姿の織斑千冬を見ていた
周りにはＩＳスーツを着た女子達がいる。このＩＳスーツ、水着に似た形状をしている。つまりケーンの周りを水着姿の女子が囲んでいるような状態なのである
ケーンは元からスケベなためケーンにとってかなり嬉しい状況なのだが、なにぶん今は授業中、下手にジロジロ見れば変態の烙印をおされてしまう
そのため必死で見ても問題のないだろう千冬を見ているのである
ちなみにケーンはＩＳスーツではなくパイロットスーツを着ている。こちらのほうが楽らしい

「それではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織

斑、オルコット、そしてワカバ試しに飛んでみせろ」
言われてセシリアはＩＳを展開する

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで１秒とかからないぞ」
せかされ一夏とケーンは意識を集中する

「（頼んますよクララちゃん）」
といってもケーンはクララ頼みだが
二人のＩＳがそれぞれ展開される

「よし、飛べ」
千冬の合図により飛び上がるセシリア。それに少し遅れてケーンも
飛び上がる。しかしあっという間にセシリアを抜いてしまう

「ケーンさん速いですわね。とても初心者とは思えませんわ」
追いついたセシリアがケーンを褒める

「そうか？まあ自慢じゃないが軍じゃあエースだったからな」

「あら、軍に入っていらしたの？」

「おう。まあ成り行きだけどな」
ケーンとセシリアが談笑してるところに遅れて一夏が到着する

「織斑、オルコット、ワカバ、急降下と完全停止をやってみせろ」

「了解です。ではお先に」
セシリアは地上へと急降下し見事成功させる

「なるほど、んじゃ俺も」

ケーンも同じように急降下し成功させる

「本当にすごいですわね」

「そうか？」

ズドォォン！！

「なんだ！？」

音のしたほうを見ると一夏が落下して大きなクレーターができていた

「馬鹿者。誰が地上に墜落しろと言った。グラウンドに穴をあけてどうする」

「・・・・すみません」

「さっさとのぼってこい。ワカバ、セシリア、武装を展開しろ」

「（武装・・・・）これか」

とりあえずハンドレールガンを展開するケーン

「まあまあだな。もう少し早く展開できるようにしろ。次オルコット」

言われてセシリアは狙撃銃スターライトｍｋ３を展開する

「さすがだな代表候補生。ただしそのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な「直せ。いいな」・・・・はい」

千冬はチラリと時計を見る

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グランドを片付けておけよ」
一夏を残しみんな更衣室へとむかっていった

夜　学生寮

「はぁ～」

「どうした？ケーン。ため息なんかついて」
現在ケーンはタップとライトの部屋にいる

「いや、いつ元の世界に帰れるのかなって思ってよ」
ベッドに腰掛けながら少し寂しそうに語るケーン

「どうやってこっちの世界にきたのかわからないとな。それにドラグナーも元に戻ってくれないと戻っても意味がないだろうし」
パソコンをいじりながらケーンと話をするライト

「そういやケーン、お前はいかないのか？」
ベッドに寝そべっていたタップがケーンに質問する

「なにがだ？」

「ほら、食堂で1組のクラス代表決定を祝ってたじゃねぇか。お前も代表になったんだろ」

「織斑がいれば充分だろ。それにいきなり代表になった俺がいても邪魔なだけだろうしな」

「そうか？むしろ歓迎される気がするけどな」

そんな話をしているとドアがノックされ一人の少女が入ってきた

「ん？誰だ？」

ライトはパソコンをいじるのをやめ少女のほうをむく

「あたしの名前は凰鈴音（ファン・リンイン）。あんた達が2組のクラス代表？」

「まぁ嫌々ながらな」

「なんだおまえらも代表になったのか」

「まぁな。で、それを聞いてどうするんだ？」

タップはベッドから身をおこし質問する

「どっちかあたしとかわりなさいよ」

「そりゃあ有り難いが、なんでだ？」

「理由なんてどうでもいいでしょ。で、かわってくれるの？」

「どうするタップ？」

「公平にじゃんけんで決めようぜ」
「「ジャンケンポン！」」
タップ：グー
ライト：パー
「よし勝った。じゃあ俺がかわるよ」
「え？普通負けたほうじゃないの？」
「細かいことは気にしない。それより先生にかわること伝えないとな。行くぞ」
そういってライトは立ち上がり、リンと共に部屋をでていった
「ケーンさん、ここにいらしたのですね」
「セシリア？どうしたんだ？」
ライト達と入れ違いでセシリアが部屋に入ってくる
「いえ食堂にいらっしゃらなかったので探しに。参加なさらないのですか？」
「俺がいても邪魔なだけだろ」
「そんなことないですわ。皆さんケーンさんがいらっしゃらないのでつまらなさそうにしていましたよ。さっ、行きましょ」
ケーンの手を掴むセシリア
「しかたねぇ、じゃあ行くか」

「ええ行きましょう」
二人で手を繋ぎ部屋をでていくケーンとセシリア
「リンダちゃんがいるのに浮気なんかしていいのかねぇ」
その後ろ姿を見ながらタップは一人ぼやいた

第3話　ケーン、代表になる（後書き）

教えて！ライト先生！

ライト「よーし今日はアンケートをとるぞ」

ケーン「アンケート？ＭＡについてじゃなかったのか？」

ライト「時期的に早いと思ったからな。さてアンケートだがタップと俺に関係するアンケートだ」

タップ「俺とライトに？」

ライト「ずばりタップと俺にヒロインをつけるかどうかだ。このままだとケーンのハーレムになるかもしれないからな」

ケーン「俺のハーレム？そりゃあやばいな」

ライト「というわけで次から一つ選んでくれ」

1タップとライトにもヒロインを

2ケーンハーレム

ライト「では今回はこれでおしまいだ。じゃあな」

第４話　ケーン、一夏と特訓を行う（前書き）

ちょっときりが悪かったかな？

第４話　ケーン、一夏と特訓を行う

「転校生？」

「ええ、なんでも中国の代表候補生らしいですわ」
１組の教室でケーンとセシリアが話をしている

「中国の代表候補生ね～」
ケーンは昨日タップ達の部屋にいたときに尋ねてきた鳳　鈴音を思い出す

「（十中八九あいつだろうな）」

「あら？」

「ん？」
ふと教室の前のほうを見ると入口に二人ほど立っている。そこには鳳　鈴音となにやらため息をついているタップがいた

「鈴・・・？お前、鈴か？」
一夏が驚きの声をあげる。どうやら知り合いのようだ

「そうよ。中国代表候補生、鳳　鈴音。今日は宣戦布告にきたの」
ふっと小さく笑みを漏らす鈴

「いくら格好つけてもお前の小さい体には似合わないぞ」
鈴の後ろから声がする

「な、なんですって！」

鈴の後ろにはいつからいたのかライトがいた

「ライト？お前いつからいたんだ？」

「ん？ずっと後ろにいたぞ？」

「え？」

「まぁこっそりついてきたから気づかなくてもしかたないわな」

「いや、なんでこっそりついてきたのよ」

「いや二人が宣戦布告にいくとか言うから面白そうだと思ってな」
笑いながら話すライト

「俺はそんなこと言ってないっての」
心外だといった様子で話すタップ

「というか鈴、なんでお前がここに？」
話に無理矢理割り込む一夏

「なんでここにいるのかって？それは『バシッ！』いたっ！ちょっと！誰・・・・・よ・・・・」

ここにいる理由を話そうとしたとき鈴は頭を叩かれた。痛みを我慢しながら振り向くと織斑千冬が立っていた

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・・って、あいつらは？」

後ろにいたはずのタップとライトはいつの間にかいなくなっている
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません」
すごすごとドアからどく鈴
「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」
２組へと向かって猛ダッシュする鈴
「アイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」
一夏がそう呟くと
「・・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」
箒やそのほかクラスメイト達が質問を始める
そんなことをしていれば
バシンバシンバシン！
「席に着け、馬鹿ども」
千冬の出席簿打撃を受けないわけがない
打撃を受けたクラスメイト達は急いで席につく
そして今日も一日ＩＳの訓練と学習が始まる

Ｓｉｄｅセシリア

「き、聞いてませんでした・・・・」

ぱしーん！

教室に箒を叩いた音が響く

「（めずらしいですわね。いつもは真面目ですのに。しかしさっきの鳳さんでしたっけ？あの感じ、間違いなく一夏さんに惚れてますわね。篠ノ之さんも惚れているようですし一夏さんはどうするのかしら？というか一夏さんは二人のことをどう思っているのかしら？・・・・・・ケーンさんは私のことをどう思っているのかしら）」

ちらりと隣のケーンを見る

ケーンは爆睡していた

「な、ケーンさん？起きてください」

セシリアは小声でケーンに呼びかけ起こそうとするが時すでに遅く

パーン！

「いってー！」

出席簿で頭を叩かれ飛び起きるケーン

「授業中に眠るとはずいぶん余裕だな。どれ、これの答えを言ってみろ」

「え！えーと・・・・・・わかりません！」
パーン！

Ｓｉｄｅ三人称
昼休み

「いって～、ひどいめにあったぜ」

「自業自得ですわ」
ケーンはセシリアと共に学食へとむかっていた
途中タップとライトと合流し、券売機で食券を買う

「なにやってんだ鈴？」
ライトがラーメンののったお盆を持ちながら突っ立っている鈴に話し掛ける

「なんだライトか」

「なんだとは失礼だな。で、なにやってるんだ？ラーメンのびちまうぞ」

「しかたないでしょ、一夏がこないんだから」

「一夏ねぇ。まぁがんばれよ」
そう言って鈴から離れる
おばちゃんに食券を渡しそれぞれ頼んだものを受け取り空いていたテーブルに座る。ちなみに頼んだものはケーンがカレーうどん、タップがカツ丼、ライトとセシリアが洋食ランチである

「そういえばケーンさん。特訓はしないんですの？」

「特訓？」

「ええ、クラス対抗戦はチーム戦ですからパートナーである一夏さんと特訓したほうがいいのでは？」

「織斑とね～。まあ声かけてはみるか」

「となると、俺も鈴と特訓したほうがいいのか？」
カツ丼を食べ終わったタップが呟く

「そうだなやったほうがいいだろう。鈴のＩＳがどんなタイプかも見なくちゃいけないしな」
タップの呟きにライトが賛成する
その後昼食を食べ終えた四人はそれぞれの教室へと戻っていった

放課後　第三アリーナ
ＩＳを展開したケーンと一夏が向かい合っている
これからお互いの実力を知るために模擬戦をやろうとしているのである
ピットではセシリアと箒の二人が観戦している

「はぁぁぁぁ！」
一夏が雪片弐型を構えケーンへと突っ込む
確実に刃がケーンにあたる。ピットにいる二人はそう思っただが

「らぁ！」
ケーンは切っ先を避け、腰からレーザーソードを抜きカウンターのように切り付けた

ピット

「まぁ・・・・・」

「これは・・・・すごいな」
セシリアと箒が驚いていると後ろから声が聞こえてきた
「見事にやられてるな」
セシリアと箒が振り向くとそこにはライトがいた
「ライトさん？どうしてここに？」
「織斑のやつが惨敗するんじゃないかと思ってな。見に来たんだが・・・・やっぱり負けてるな」
「一夏がああなるのをわかっていたような言い方だな。ワカバのあれはなんなんだ？」
「あれは『見切り』。ケーンが文字通り、死ぬ気で修業して身につけた技だ」
「見切り・・・・」
「俺達が異世界からきたのは話たよな？その異世界にいたときケーン、というか俺達三人はグン・ジェム隊ってやつらにボロ負けしてな、そいつらに勝つためにケーンが得とくしたんだよ」
「まぁ、そんなことが・・・・」
「ふむ・・・・」
セシリアと箒はただただ驚いていた

再びアリーナ

「うぅ〜」

一夏はへばっていた

「だらしねぇぞ織斑」

「そんなこと言ってもなぁ。あと一夏でいいよ。パートナーなんだしさ」

「じゃあ俺もケーンでいいぜ。ほら立て、せめて俺に一撃はあてないとな」

「うぇ〜、まじかよ」

ピット

特訓を終えたケーンと一夏は別々のピットへと戻った

「お疲れ様ですわケーンさん。タオルとドリンクをどうぞ」

「おぉ、サンキュー」

ＩＳを解除しセシリアからタオルとドリンクを受け取る

「しかし織斑のやつ、結局一撃も当てられなかったな」

「なんだライト、いたのか。まぁ頑張ってたみたいだが、まだまだだな」

「言うようになったねぇ。明日もやるのか？」

「まぁな。ただしライト、お前はくるな」

「ど、どうしたんですの急に？」

急なライトはダメ宣言にセシリアは困惑する

「長い付き合いの俺の対策はともかく一夏の対策までとられたら面倒だからな」

「あらら、ばれてたか」

「え、じゃあライトさんは対策をたてるために？」

「まあな。まぁ今日のデータを見ればだいたいの対策はできるから明日はこないさ」

「は、一夏は俺が強くするからな。そのデータは役に立たないぜ」

「ふ、言ってろ」
ライトはピットからでていく
「こりゃ予想以上にハードだな」
ケーンは一人呟いた

第４話　ケーン、一夏と特訓を行う（後書き）

教えて！ライト先生！

ライト「さてアンケートだが現在俺にヒロインが優勢だ。というか候補から消した一夏ハーレムを除けばそれだけだ」

ケーン「作者はどうするのかね～」

タップ「一応ヒロインは考えてるらしいぞ。というか今回俺セリフ少なっ」

ライト「まぁたぶん俺にヒロインがつくことになるな。じゃあまた次回だ」

第5話　クラス対抗戦始まる（前書き）

大変おまたせいたしました

第5話　クラス対抗戦始まる

ＩＳ学園
タップとライトの部屋
ライトは部屋においてあるパソコンにむかいながらケーン達の対策データを作っていた

「やはりケーンに接近戦を挑むのは無謀か・・・・やはりタップをあてるか。となると織斑には鈴だが・・・・」
そこで考え込むライト

「織斑はＩＳ操縦者としてはまだまだ未熟だがケーンにどれだけ鍛えられるかが問題だな。ここはやはり・・・・」
一人でぶつぶつ呟いていると

「あんたなにやってんのよ」
後ろから鈴に声をかけられた

「ん？ああ鈴か。どうした？織斑とのトラブルか？」

「な、なんでわかったのよ・・・・」

「そりゃあ涙目で顔真っ赤にしてたら誰かとトラブルがあったと思うだろうよ。クラス内でのいざこざは無かったし他のクラスにいる知り合いといったら織斑ぐらい。だからおそらく織斑とのトラブルだと思った。そんなところだ。あってるか？」

「・・・・・その通りよ。一夏のやつ私との約束をちゃんと覚えていなかったのよ」

拳をにぎりしめながら語りはじめる鈴

「つまり、篠ノ之と織斑が同じ部屋なのを知り変わってもらおうと部屋へいって織斑と話してたら約束の内容を勘違いしておごってくれると覚えていたと」

「そうよ。一夏のやつ、なんでちゃんと覚えてないのよ・・・・・」ベッドに腰掛けながらプルプルと震えている鈴

「（なんとも罪づくりな男だな織斑は）というか普通に告白をすればよかったんじゃないか？」

「う！たしかにそうなんだけど・・・・そ、それよりあんたはなにしてたのよ」

「（話を反らしたな）1組の二人の対策をたててたんだよ」

「？なんで1組なのよ。一回戦の相手はまだわからないでしょ」

「一番たてやすかったからだよ。ケーンもいるしな」

「ケーンってあんたとよくつるんでる1組の代表のこと？」

「ああ。でだ、さらに詳しく対策をたてたいから、明日タップと模擬戦をしてくれ」

「なんで模擬戦しなきゃいけないのよ」

「お前の癖とかタップとの相性を調べるためだ。勝たなくてもいいなら別にいいが」

「勝ちたいにきまってるでしょ！やるわよ模擬戦」

「そうか、それならいいんだ。まあ、とりあえずは織斑ととっとと仲直りすることだな」

「う！・・・・わかったわよ」

そう言って鈴は部屋をでていく。鈴と入れ違いでタップが部屋に入ってくる

「鈴のやつ、どうかしたのか？」

「いや、織斑が罪づくりな男だっただけさ」

「なんだそりゃ・・・・・」

さて、それから対抗戦までいろいろあった。例えば仲直りしにいった鈴に話がこじれたのか一夏が貧乳と言って鈴を激怒させたり。タップと鈴が意外といい勝負をしたり

まあ、いろいろあったわけだ。そうそうクラス対抗戦の組み合わせだが2組の相手は1組だった。鈴がやたら気合い入ってたなで、今日が試合当日なわけだが

『それでは両チーム、規定の位置まで移動してください』
どうやら始まるみたいだな。さてどんな戦いになるかな？

アリーナに４機のＩＳが向かい合っている
１組のＤ－１、白式。２組の甲龍、Ｄ－２。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

「タップ、言っとくが遠慮はしないからな」

「へっ、俺だって強くなってんだぜ？どーんときやがれ」
４機のＩＳがそれぞれ火花をちらす

『それでは両チーム、試合を開始してください』
ビーッとブザーが鳴り響く。それが切れる瞬間に鈴が動いた

「くっ！」
鈴がふるってきた青龍刀を瞬時に展開した雪片弐型で防ぐ一夏

「ふぅん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど！」
鈴のふるう青龍刀に翻弄される一夏

「うおっ、くそ！」
助けに入りたいケーンだがタップの砲撃がそれを阻む

「おらおらおら！どうしたケーン。そんなもんかぁ！」

「くそっ、なめるなよ！」
肩からなにかを取り出しタップに投げ付ける。それは銃弾の一つにぶつかると大爆発した

「うおっ」
爆発に少し怯むタップ。ケーンはその隙を見逃さないとばかりにレーザーソードを抜きタップに切り掛かる
しかしここでＤ－１のコンピューター、クララが突然ケーンに警告をだす

「あぶねっ！」
警告をうけ停止したケーンの前を見えない砲撃が通り過ぎた
どうやら鈴が衝撃砲『龍咆』を撃ってきたようだ
一夏と戦いながら正確に狙ってきたのはさすが代表候補生といったところか

「めんどくさいな。しかたない・・・・奥の手だ！」
そういいながら新たな武器を展開しようとするケーン。しかし
ズドォーン！！
それを邪魔するかのようになにかが降ってきた

「なんだいったい？」

「あんた達、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

「いきなりなんだよ鈴」

一夏がそういったときＩＳのハイパーセンサーが緊急通告をしてきた

『ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています』

『一夏、はやく！』

「お前はどうするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐからその間に逃げなさいよ！」

「逃げるって・・・・女を置いてそんなことをできるか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

なにやら言い争いを始める一夏と鈴

そんな中ケーンにむけて一筋の光線が放たれる

「あぶなっ！」

それを間一髪といったところで避けるケーン

「大丈夫かケーン！」

「ああ大丈夫だ一夏。だがあいつ相当やばいぜ」

自分の周りの煙を払うかのように放たれた光線。そこから姿を現したのはまさしく異形といえるＩＳだった

「てめぇ、なにもんだ！」
「・・・・・・・・」
ケーンの呼びかけに答える様子がない乱入者
『みなさん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がＩＳで制圧に行きます！』
山田先生が早く逃げるように行ってくるよ
「・・・・・タップ」
「なんだよケーン」
「へっ、わかってんだろ？」
「あとで飯おごれよ！」
「安いやつならな！」
その言葉とともに二人は乱入者にむかっていく
『ワカバくん！？オセアノくん！？』
「あの馬鹿二人は・・・・私達もいくわよ一夏！」
「お、おう！」
続いて鈴と一夏もむかう
『鳳さんに織斑くんまで！駄目です！すぐ戻ってくだ』
通信はそこで途切れた。同じくして敵ＩＳが体を傾けて突進してくるそれを避ける四人

「おらおら！ドラグナーだ！当たるといてえぞ！」

「もしもし！？みなさん！？」

「落ち着け山田先生。本人達がやる気なのだ。やらせてみればいい」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「・・・・あの、先生。それ塩ですけど・・・・」ピタリとコーヒーに運んでいたスプーンを止める千冬

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ？でもあの、大きく塩って書いてありますけど・・・・」

「・・・・・・」

「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですね。だからそんなミ

スを・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙。真耶はなにやら嫌な予感がした

「あ、あのですねっ」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え？あ、あのそれ塩が入ってるやつじゃ・・・・・・」

「どうぞ」

押し付けられるコーヒー（塩入り）。真耶は涙目でそれを受け取った

「い、いただきます・・・・」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔がそこにいた

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

声を荒げながら言うセシリア

「そうしたいところだが、これを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第二アリーナのステータスチェックだった

「遮断シールドがレベル４に設定？しかも、扉がすべてロックされて、あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援にむかうこともできな

いなあ」
落ち着いた様子で話す千冬だが、その手は苛立ちを抑え切れないとばかりにせわしなく画面を叩いている
「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を」
「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」
言葉を続けながら、益々募る苛立ちに千冬の眉がぴくっと動く。そんな時だった
「む？遮断シールドが・・・・扉のロックも解除されているだと？」
「・・・・・」
なにやら黙って立っている箒
「・・・・・篠ノ之。なにか知っているようだな」
「・・・・・先程ニューマンが」
箒が言うには飛び出そうとした自分をライトが止め、自分がなんとかすると言いでていったらしい
「ニューマンが？」
千冬はピットを見る。そこにはＤ－３を展開しシステムをハッキングしているライトがいた

「すごいな・・・・」
タップが撹乱しケーンが隙を見てレーザーソードで切る。息がピッタリの二人におもわず感心する一夏

「ぼけっとしてないであんたも攻撃しなさいよ一夏！」

「あ、ああ」
その時ビームの砲撃口が鈴へと向けられビームが発射された
当たるギリギリのところで駆け付けたライトが鈴を助ける

「大丈夫か鈴？」

「ら、ライト！？なんであんたが・・・・というか離しなさいよ！」
ちなみに今の状態はライトが鈴を抱き上げている状態である

「はいはい、わかりましたよ」
そう言いながら鈴を離すライト。そこに謎のＩＳを一時的に行動不能にしたケーンとタップが近づく

「ようライト。お前もきたのか」

「ふっ。お前達ばかりにいいかっこはさせらないからな」

「そうだ。三人そろったことだし久しぶりにあの手でいこうぜ」

「あれだな。ＯＫまかせろ！」

「ああ、久しぶりにやるか」
謎のＩＳが動き出すのと同時に三人は謎のＩＳにむかって飛んでいく。敵ＩＳを掴み動きを封じると上昇を開始する

「あいつらなにをする気？」

「いくぜ！恐怖の！」

「トリプル！」

「子なき爺！」
いっきに降下しギリギリのところで敵ＩＳを離し地面に衝突させる

「トドメの・・・・一撃ぃぃぃ！」
レーザーソードをトドメとばかりに突き刺すケーン
謎のＩＳはまったく動かなくなった

「バカ共が・・・・」
その光景を見ていた千冬はそう呟いた

ケーン、タップ、ライトの三人はグラウンドを走らされていた

なぜ彼等だけがというと無茶をしたことによる罰である。恐怖のトリプル子なき爺は相手ＭＡを三機で捕まえ上昇からの急降下で地面にたたき付ける技なのだが、この技下手すれば自分達も地面にぶつかる危険性がある技なのだ
自分達がケガをするかもしれないということで今後使用は禁止。無茶をした罰としてグラウンド十周が三人にくだされた

「くっそ～。大活躍したヒーローにさせることかよ、これ」
まったく反省した様子のないケーン。ちなみにケーンは涙目セシリアに抱き着かれながら説教されるという貴重な経験をしている

「はぁ、こんなことになるならやらなきゃよかったぜ」
後悔している様子のタップ

「まさか走らされることになるとはな」
こいつは計算外だぜとライト
そんなことを話ながらもなんとか十周を走りきる

「ふん、体力だけはあるようだな三バカ」
監視をしていた千冬が走り終えた三人に近づいてきた

「三バカって俺達のことっすか？」

「お前達以外に誰がいる三バカが」
どうやらもう呼び名は三バカで決定らしい

「三バカか・・・・なんだろうかすでに何度も言われているような気がする」

「気のせいだろ」

「気にしすぎだぜケーン」
とりあえず終わったので更衣室へとむかう三バカ
「お疲れ様ですわケーンさん」
更衣室にむかう途中セシリアがそういいながらケーンにタオルとドリンクを渡す
「お、サンキューセシリア」
「やれやれ出会ったばかりのころに比べてデレすぎだと思うんですがね。そこらへんどう思いますかライトさん」
「俺もデレすぎだと思うぜタップさん」
「あ、あなたたちー！」
顔を真っ赤にしながら怒鳴るセシリア。急いで更衣室にむかう二人だったが、途中ライトは誰かに服を引っ張られて立ち止まる。振り向くと鈴が立っていた
「なんだ鈴か」
「なんだとはなによ。私がいちゃいけないの？」
「いや、オルコット嬢に追いつかれたのかと思ってな。それでなにか用か？」
「・・・・・・これ」
そう言って差し出してきたのはスポーツドリンクの入ったペットボトル

「ん？差し入れか」

「お礼よ。あのＩＳの攻撃から庇ってくれたお礼」

「ふーん。まあ有り難くちょうだいするよ」
ありがとよと言いながら鈴からペットボトルを受け取り更衣室にむかう

「・・・・・・・・ありがと」
その言葉が聞こえたのか聞こえてないのか。ライトは微笑みながら更衣室へとむかっていった

第5話　クラス対抗戦始まる（後書き）

教えて！ライト先生！

ライト「今回は作者が読者に教えてほしいことを発表する」

ケーン「作者が教えてほしいこと？」

ライト「簪というキャラについて教えてほしいらしいのだが」

タップ「簪って・・・・・だれだ？」

ライト「いくつかのＩＳ作品に登場しているのだが作者はよく知らないらしい。現在所持している原作にも登場してないしな」

ケーン「金欠で買えないって言ってたな作者」

ライト「というわけで知っている人はできればメッセージで教えてほしい」

タップ「ｗｉｋｉだけじゃよくわからないんだよな～」

ライト「では今回はここまでだ。また会おう！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5351r/

ISwithＤ〈インフィニット・ストラトスwithドラグナー〉

2011年9月10日04時16分発行